

KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 97 号 令和 3 年 3 月 20 日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



テツカイガ峯（鉄拐山）、一ノ谷、内裏跡 芭蕉の句「蝸牛（デンデムシ） 角ふりわけよ 須磨あかし」
『撰津国矢田部一ノ谷』一部分 貴重資料デジタルアーカイブズより

芭蕉、鉄拐山に這い登る

芭蕉が須磨・明石を訪れたのは貞享五年（一六八八）旧暦四月、四十五歳の時、『奥の細道』の旅に出る前年のことです。旅の足跡を紀行文『笈の小文』や郷里伊賀の門人に送った書簡から知ることができます。

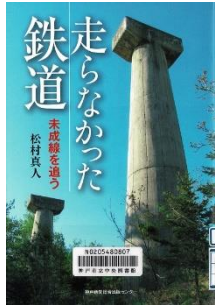
この旅で、芭蕉は山頂から須磨の古戦場を見ようと鉄拐山に登っています。山道が険しいので道案内の子が嫌がるのを「麓の茶店にて物食らはすべし」などとなだめすかし、「羊腸險岨の岩根を這ひ登れば、すべり落ぬべき事あまた度なりけるを、つつじ・根ざさに取りつき、息をきらし、汗をひたして」登りました。

苦労して登った山上からは淡路島が手に取るように見え、須磨・明石の海が広がる美しい風景を眺めました。この後、一ノ谷、安徳帝内裏跡を眼下にした芭蕉は、そこで繰り広げられた源平の合戦を思い浮かべ、敗走する平家の有様を悲哀に満ちた文章で綴っています。

景勝に恵まれ史跡に富んだ須磨は、芭蕉の憧れの地でした。陽春のころ、山上に立って和やかな内海を眺め、目を閉じると芭蕉が見た情景を見ることができると芭蕉が言っています。

走らなかった鉄道―未成線を追う
松村真人（神戸新聞総合出版センター）

未成線とは、計画で終わったり、建設途中で放棄されたりして、完成に至らなかった鉄道路線を指す。北海道の名羽線、佐賀県の呼子線、県内では阪神海岸鉄道、神戸地下鉄道など、十三の未成線を紹介し、各路線がどのように計画され、なぜ中止になったのか、その経緯を資料から紐解いていく。さらに、著者自ら現地に足を運び、未成線建設の痕跡や予定ルートを探し歩く記述も興味深い。もし路線が完成していたら、そこにどんな駅舎や街並みが現れていたのだろうかと思像が膨らむ。



志ほや歴史物語 北川保幸著・発行

垂水区塩屋で生まれ育った著者が、塩屋地域の歴史や独特のしきたり、方言、阪神・淡路大震災による被害など、多岐にわたる内容について、郷土資料や地元の古老の話、自身の体験を基にまとめた。地域が紡いできた想いや歴史、生活や遊びを将来に渡って継承したいという著者の志が、タイトルの「志ほや」に込められている。平成二十九年塩屋まちづくり協議会が発行した『塩屋見聞録』と本書を併せて読めば、塩屋の史跡と茅渚の浦の眺望がより楽しめる。

花森安治選集 全三巻 花森安治

（暮しの手帖社）

主に『暮しの手帖』に掲載された花森安治の散文、随筆、コラム、評論などを、「美しく着ることは、美しく暮らすこと」「ある日本人の暮らし」「ぼくらは二度とだまされない」の三つのテーマに分けて収録したもの。

第二巻に収録されている日本紀行「KORE」では、生まれてから少年時代まで過ごした神戸を「これからの日本が大切にしなければならない町のひとつ」と記している。

神戸・姫路の画家たち 芝本政宣

（神戸新聞総合出版センター）

著者が雑誌等に発表した美術批評を、まとめて一冊の本とした。神戸に住んだ鴨居玲、昇外義、姫路藩主の孫であった酒井抱一ほか、西村功、西田真人ら郷土ゆかりの画家と作品を、独自の視点で綴った。洋服店、眼鏡店のショーウィンドーに飾られた鴨居の絵、タウン誌『神戸っ子』や神戸を代表するフランス料理店の壁面を飾った西村の絵など、市民に親しまれている作品も紹介し、その魅力を伝えていく。

カツベン 詩村映二詩文 季村敏夫編

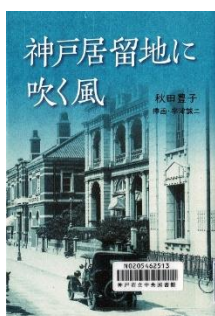
（みずのわ出版）

明治末から昭和初めにかけて活躍した或る活動写真弁士（「説明者」と自称した）の詩文をまとめた。三宮や新開地の映画館で、観衆を魅了した弁士とは？収録された詩編や「カツベン行進曲」という散文、「雲の精神」と題した編者による解題から、その実像を伺い知ることができる。二部構成の後半では、弁士の貴重な写真や映画雑誌などを収録し、彼が生きた時代・背景を探っている。

神戸居留地に吹く風 秋田豊子（神戸新聞総合出版センター）

幕末の激動の中で兵庫が開港し、神戸の居留地に多くの外国人が来日した。その中の一人、ドイツ人貿易商チャールズ・ランゲ・デラカンプト、祇園の舞妓・ひでの出会いから物語ははじまる。

国籍や言葉の違いを越えて結ばれた二人の生涯を中心に、実在のデラカンプト商会、神戸のドイツ人社会の様子が詳細に描かれている。明治・大正・昭和の戦争や災害など、歴史的な出来事も記される。二度の世界大戦の影響で日独関係が変化し人々が翻弄される中、寄り添い続ける二人のゆるぎない姿が胸を打つ。



ユーモアのある風景 織田正吉（編集工房ノア）

著者は昭和六年に生まれ、一家で神戸大空襲に遭った。戦後神戸大学卒業後は神戸市に就職し、市長の書記をつとめるかたわら、演芸やラジオ放送の台本を執筆した。三十七歳で退職後は文筆活動に専念し、多数の台本の他に、笑いや古典文学に関する著書を出版した。本書はこれまで図書に未収録の文章をまとめたもので、貫かれているのは、笑いとユーモアへの愛情である。「米朝山脈」「わが青春の新開地」など、関西の演芸人達を同時代に見てきた随筆は、戦後文化の復興とともに話芸・演芸が興隆を極めた時代を肌で感じさせる。



今から三十年前、当館二階に「神戸ふるさと文庫」を開設するにあたり、織田正吉氏には、有識者会議の委員をお引き受けいただきました。そのご縁から『KOBÉの本棚』をお送りし、「ありがとうございます。偶々まで読んでいますよ」と、直筆のお葉書をいただいたこともありました。とても有難く光栄に感じています。織田氏は昨年十一月二十日にお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

神戸散歩―色々なモノクローム 民井達也 切り絵・文（神戸新聞総合出版センター）

神戸で生まれ、地元でバーテンダーをしながら切り絵を制作してきた著者が、画集を出版した。

表紙を飾るポトタワーを始めとした神戸の街の景色や、行きつけの店で働く人々などの切り絵それぞれに添えられた文章からは、著者自身の温かい人柄が読み取れる。本を片手に神戸を散歩し、切り抜かれたモノクロ世界の色を確認しに行ってみたくなる。

パンデミック下の書店と教室―考える場所のために 小笠原博毅 福嶋聡（新泉社）

神戸大学大学院教授の小笠原博毅氏とジュンク堂書店店長の福嶋聡氏が、コロナ禍の「考える場所」について交わした書簡をまとめた。教室での雑談や、書店での本との出会いを通して、様々な考え方に触れることが大切だという。

感染のリスクを承知のうえで来店するお客さんの姿を見ると、どんな本でも不要不急のものとは思えない、という福嶋氏の言葉が胸に響く。

||その他の新刊||

金田一耕助語辞典 木魚庵文 UCHIAN 絵（誠文堂新光社） Y O

神戸8人のパティシエが作るスペシヤリテ64 ORIGIN E KO BE 編（旭屋出版） 小林宣 占領期の都市空間を考える 之 玉田浩之編（水声社）

神戸 その21 あんな人こんな人

高田 蝶衣 たかた（たかだ）・ちょうい 明治19年(1886)～昭和 5年(1930)



「窓あけて見ゆる限りの春惜む」

高田蝶衣は、淡路島の釜口村生まれの俳人です。洲本中学校時代に、俳人の大谷繞石から俳句を学びました。繞石は後に、著書『己がこと人のこと』（春陽堂）の中で、教え子の蝶衣について「明治大正昭和年代の最も傑出した俳人の一人」と述べています。俳句に専念するあまり、落第候補者に名が挙がった蝶衣でしたが、校長の「一芸に秀でている」という助言で卒業できたという話が残っています。その後、蝶衣は繞石を頼って上京し、高浜虚子や河東碧梧桐らと交わります。冒頭の句は、虚子の俳句会で、最年少（20歳）の蝶衣が詠んだ句です。明治41年に『蝶衣句集』（俳書堂）を出版し、個人句集の出版が珍しかった当時、注目を集めました。大正6年には神戸市楠町に居を構え、湊川神社の神職に就きます。結核を発病したため、二年足らずで休職しますが、昭和4年に帰郷するまでの十年余りを神戸で過ごしています。大正15年に神戸で創刊された俳誌『ひむろ』との関わりも深く、寄稿や選句などの支援を行いました。蝶衣は晩年まで病気に悩まされ続けましたが、病中においても欠かすことなく句作に励みました。享年45歳。俳句一筋の人生でした。



参考：『俳人・高田蝶衣』小早川健（翰林書房）『ひと萌ゆる：知られざる近代兵庫の先覚者たち』（神戸新聞総合出版センター）『己がこと人のこと』大谷繞石（春陽堂） 写真右上：『ひむろ』第5巻 11月号 蝶衣居士追悼号（昭和5年）

明治期の外国人と神戸の古墳

アーネスト・サトウとW・G・ア
 ストンは、江戸末期英国から日本に
 派遣され、幕末から明治への転換に
 立ち会った外交官です。日本文化に
 興味を持ち、膨大な資料を蒐集し、
 日本関連の著作を成した日本学者と
 しても知られており、日本の古墳に
 も興味を持っていました。

サトウの日記によると、明治十四
 年（一八八二）十月下旬にジョージ
 王子（後のジョージ五世）エリザベ
 ス女王の祖父）と、その兄 ヴイク
 ター王子が来日し、サトウは十一月
 王子達を神戸から京都、奈良、大阪
 へと案内しました。サトウは以前か
 ら興味を抱いていたアストンの調査
 した舞子の古墳群の見学も計画しよ
 うとしていましたが、予定があわず、
 諦めきれないサトウは、王子達とは
 別行動で、アストンと共に人力車で
 舞子に出かけたことと記しています。

当時アストンは、神戸にあった兵
 庫・イギリス領事館に勤務していま
 した。大阪造幣寮に化学兼冶金師と
 して勤務しながら古墳調査に熱を入

れ、日本の考古学の父と言われるこ
 とになるW・ガウランドと親交があ
 り、文献で調べた近畿周辺の陵墓に
 該当しそうな古墳に、誘い合わせて
 出かけています。アストンの書簡に
 よると、アストンはガウランドも舞
 子古墳群に案内されています（舞子東
 石ヶ谷二号墳と考えられます）。また、
 アストンはガウランドに「チェンバ
 レン（古事記の最初の英訳者）の記
 載に出てくる悲恋伝説の菟名比処女
 に関する古墳を見学した」と報告し
 ています。これは、処女塚古墳・西
 求女塚古墳・東求女塚古墳の三古墳
 を指し、「土器を拾った」と記してい
 ます。さらに、明治十五年（一八八
 二）三月には玉津王塚古墳の見学を
 計画しましたが、「遠かったので垂水
 の古墳を見学した」と書いています。
 これは、五色塚古墳のことです。



上：処女塚古墳、求女塚古墳
 下：五色塚古墳 『攝津名所地圖』
 (寛文7) (神戸市立中央図書館所蔵)

五色塚古墳は古くは『日本書紀』

に、そして江戸時代の文献としては、
 『播州名所巡覧圖繪』などに記述さ
 れています。現在ケンブリッジ大学
 図書館所蔵のアストンの旧蔵書に、
 『播州名所巡覧圖繪』があることか
 ら考えると、アストンが同書を見て、
 興味を深めたのであろうことが推測
 できます。

大英博物館収蔵資料によると、
 アストンはヘボン塚古墳（東灘区）
 にも足を延ばし、調査を行っていた
 ことが確認できています。さらに、
 脇浜の古墳も見学していたようで、
 「二つの小さなマウンドがある」と
 記しています。脇浜（中央区）には脇
 浜天王塚・割塚・畔塚の三基があり
 昭和初期までは墳丘が残っていたと
 されていますが、現存していません。
 同じく同館資料によると、ガウラ
 ンドは、六甲山のピクニックのため
 に十善寺を通りがかかった際、余暇の
 楽しみの時間であるにもかかわらず、
 登山口にて埴輪を見つけ、調査を
 行ったと記しています。これは後に
 調査された十善寺古墳（灘区）と思
 われます。また、同館に収められて
 いる神出村に関するメモには、土器
 が描かれています（筆者識）。その土
 器は時代こそ下るものの特徴的な文
 様を持ち、整理番号 Franks. 2206 と

して収蔵され、大英博物館のホーム
 ページでも、閲覧可能です。



五色塚(千壺)古墳 (東北より
 望む) 『兵庫歴史蹟名勝天然
 記念物調査報告書 第一輯』
 (大正12)

日本の考古学の黎明期において、
 明治期の外国人たちによって、学術
 的調査が神戸で行われていたことは、
 非常に興味深いことです。アストン
 は、帰国後『日本書紀』の英訳を刊
 行します。五色塚古墳についての記
 述は詳しく、「舞子の東2、3マイル、
 西垂水村の断崖には、地元の言い伝
 えで仲哀天皇ちゆうあてんに関連づけられた非常
 に大きな前方後円墳がある。この古
 墳は円筒埴輪ちゆうぶちりんに囲まれている」と
 述べています。数行にわたるやや雄
 弁な注釈は、神戸に暮らしたアスト
 ンが実際に自分の目で古墳を見たか
 らこそそのものと思わずにはいられま
 せん。

参考：楠家重敏『W・G・アストン』(雄松
 堂出版)、富山直人「ゴウランドと黎明期
 の古墳研究(上)」『古代学研究』第203号ほか